

「俗信を信じる」ということ

伊藤哲司

◆「雨ごい」か「人工降雨機」か

1994年の夏は、戦後一番と言われる猛暑が見舞い、日本各地で水不足が大きな問題となった。地域によっては1日に数時間しか水道が使えないという事態になり、水が自由に使える有り難さと自然に対する人間の無力さを、多くの人々にあらためて感じさせることになった。

それでも何とか手を打たんとして各地で行なわれたのが、古くからその地に伝わる「雨ごい」の儀式である。例えば、次のような新聞報道があった。

雨ごい「江戸の舞」 急きょ“晴れ舞台”

ひどい水不足には雨ごい祈願。二十一日、愛知県半田市有楽町の成岩（ならわ）神社では「大獅子、小獅子の舞」が奉納された。

地元の六十五人で行なわれる成岩第四区獅子保存会（絹川公司会長）が企画。「大獅子、小獅子の舞」は、江戸時代から伝わる雨ごいと五穀豊作を祈る民俗芸能で昭和四十二年に県無形文化財に指定されている。渇水の中、会員から「われわれがやらないでだれがやる」という声が相次ぎ、奉納となった。榊原好夫顧問は「少なくとも明治以降、年一回の例大祭のほかに舞うのは初めて」という。（後略）

（中日新聞朝刊 1994.8.22）

雨ごいの儀式は、見方によれば非常に時代錯誤的であり、その効力をまともに信じる人は少ないかもしれない。それでも何もせずに雨を待つよりはましで、少しはそれで雨が降ってくれるのではないかと期待をした人も少なからずいたことであろう。

その一方で、「人工降雨機」で“科学的”に雨を降らせようという試みも進められた。まだほとんど試行段階で、実用までには至っていないが、次の新聞

記事を読む限り、まったく効果が期待できないというものでもないらしい。

人工降雨…初日は快晴 発煙装置を都が試運転 奥多摩湖

雲をめぐらして、煙をたき、雨を降らせる。都民の水がめ、奥多摩湖わきにある都水道局小河内発煙所で十六日、「人工降雨」を発生させる発煙装置の試運転が行われた。この日は、あいにく快晴。今後、雨をもたらすような雲の出現を待つが、装置の本格稼働は一九八七年の渇水時以来、七年ぶりとなる。

発煙所は奥多摩町にあるダムのかげの近くなど計四カ所にあり、アセトンヨウ化銀溶液を燃やし、煙を送風機の力で上空約三千メートルの雲の中に立ちのぼらせる仕掛け。ヨウ化銀の粒子は雲の中で水分を集め、雨になって落ちてくるはずで、水道局の試算では約五%の増雨効果が期待できるという。

(後略)

(朝日新聞朝刊 1994.8.17)

人工降雨機が渇水の本格的な対策になるとは考えにくいですが、渇水時に多少は役に立つのかもしれないという期待が寄せられてしかるべしと思われる。しかし、このような“科学的”な人工降雨機で、はたして本当に雨が降るのかという疑念は、その真否のほどは別として、今のところは多くの人々が抱くものではないだろうか。それよりむしろ、“非科学的”な雨ごいの儀式の方が、多くの人々に希望を抱かせるものだったかもしれない。

ここで問題にしたいのは、それらの効力が実際にあるかどうかではなく、人々がそれらの効力をどちらにどのくらい期待するかである。その際、それが“科学的”かどうかは、期待を決定する要因とは必ずしもならない。むしろ、“科学”の自然に対する無力さを人々が感じ取ることもある。「自然や人間は、“科学”の力では解明できないところがある。自然はそんな人間の力が及ぶような簡単なものではないのではないか」という考えが、そこに見え隠れしている。そんな自然に対処するには、むしろ“非科学”の方が心強く感じられることもあるのではないだろうか。

◆ “非科学”のさまざま

考えてみれば、現在は“科学的”な知識や技術が蓄積され、少なくとも日本

では、それらの一端に触れる機会は専門家でなくともいくらでもある。それにもかかわらず、いわゆる“非科学的”な事柄に対する興味・関心・信念やそれに従っての行動は、衰えないどころか、かえってますます増大しているように見える（奥田・伊藤・河野・福内，1992）。

そのような例は、いくつも挙げることができる。例えば「お日柄」である。仏滅は縁起が悪いからと婚礼を避け、友引は友を引くからと葬式を避け、先勝は先手必勝だとして勝負ごとに利用したりする。六曜も本来は月火水木金土日の七曜と同様に日数計算の尺度であった。これらの六曜をお日柄として考慮する習慣は、その文字をいわば日本語ふうに誤読したために生れたものである（井之口，1975）。

初詣に限らず神社に詣でるときは、家内安全・合格祈願などを祈ったりする。それで実際に神様のご利益が明確にあるかどうかはさほど問題としないし、そんな確認をすることも少ない。ご利益があるかどうかということよりも、詣でることによって安心感と心強さを感じることができるという方がむしろ重要なのであろう。願い事がそのとおりになった事例だけを思い浮かべて、「あその神社はご利益がある」ということになる。

明治中期に時代に欧米から日本に輸入され、いまだに若者の間で恐れられつつ広く行なわれている「こっくりさん」という一種の占いがある。具体的なやり方にはバリエーションがあるが、もともとは、3本の細木を合わせ一方の端だけを縛り、それをカメラの三脚のように立て、上に円盤状のものを載せて、それに何人かが手をかざすという形態をとる。その上でこっくりさんという霊的な存在を呼び寄せ尋ねごとをすると、手を動かしているつもりはないのに細木が「こっくり、こっくり」と動いてこっくりさんが答えを教えてくれる。「こっくり」には「狐狗狸」の字が当てられることもあり、それゆえ余計に神秘的で霊的なイメージがつきまとっている。

「血液型性格関連説」は今や日本でもっともよく知られた“性格の理論”となっている（伊藤，1994）。心理学においては、血液型と性格の関連は認められないというのが常識だが、書店に並べられる雑誌や書籍などには血液型による性格・相性判断の情報が氾濫しており、日常会話の話題としてあたりまえのように取り上げられている。血液型の情報は例えば企業の人事に考慮されるといったことすらあり（AERA，1994）、偏見や差別に直結する問題を内包しているが、そのことには多くの人が気づいていない。

占いに対する関心や人気は、一部の人々の間でますます高まっているように見える。占いに関する記事は、しばしば雑誌などで取り上げられ、『My Birthday』（実業之日本社）などの占い専門紙もある。都市の街角には露天の占い師がしばしば口コミで人気を集めたり、占いをするためのグッズの専門店があったりする。占いが載っている雑誌などには、主に若い女性をターゲットとした幸運を呼ぶという石や真珠の販売広告もあり、またそういったものを嗜好する女子高校生たちが、さまざまなジンクスやおまじない、それに学校での怪談話などの主な発信源となっている。

簡単な絵を描かせ、その“心理学的”な解釈を行なう「ココロジー」（日本語の「ココロ」と英語の「サイコロジー」を合成した言葉だと思われる）というテレビ番組が数年前にヒットした。同番組が終了後もその人気は衰えず、同名の『それゆけ×ココロジー』（青春出版社）という本は1992年上半期のベストセラーになった。この手の「心理テスト」は以前からあったものだが、ココロジーは“心理学者”が監修を行なうことで権威づけられており、また問題が単純でありながら巧妙であり、それで何となく自分や他人の心が分かったような気にさせられる。

「技術立国」を標榜しようとしている日本だが、いわゆるオカルトに関する情報がこれだけマスコミで流されている“先進国”もないと言われている。一時期ブームにすんなったユリ＝ゲラー氏による「超能力」、高い視聴率を誇る宜保愛子氏による「霊視」などは、それに対する強烈な批判がありながら、依然として根強い人気を保っている。他にも、いわゆる不思議なもの・超自然的なものを“発見”したり“解明”したとする内容のテレビ番組は、一番視聴率の高くなりやすいゴールデンアワーに、しばしば放送されている。出版物でも同様の内容のものは少なからず量産されており、本屋ではこの手の内容の本でひとつのコーナーを形成していることが珍しくない。

宗教に対する関心も一部では非常に高い。現在は新々宗教ブームであると言われ、教団間で信者数を伸ばさんと互いに争っているように見える。もちろんすべての教団がそうなのではないのだが、カルトと呼ばれる集団の中にはいわゆるマインドコントロールの技術を使って信者の考え方を根本的に操作するという人権侵害を犯し、その組織にとって都合の良い活動を強制して、ひいては社会問題を引き起こしているものもある。マインドコントロールはそれ自体中立の技術なのだが、その悪用も少なからず報告されている（Hassan, 1988;

浅見, 1994)。

◆俗信の定義および本論文の目的

本研究では、これらの「“非科学的”なことがら」を「俗信」と総称する。俗信は、「科学的検証を経ていないにもかかわらず、ア・プリオリに信じられている知識・技術・因果観」と定義できる(野村, 1982)。この定義から分かるように、俗信は「科学的検証を経ていない」のであって、「誤っている」とは限らない。俗信には例えば、「夕焼けがきれいだったら明日は晴れ」というように、経験的には正しいと思われるものも含まれている。それに俗信の内容を頭から否定してしまうことは、“科学的”な態度とは言えない。もちろん「俗信=悪」ということでもない。

先に見てきた例から分かるように、我々の身の回りには実にその類のことがらが多い。奥田他(1992)によれば、様々な俗信は5つのグループに大別することができる。すなわち、手相・おみくじ・おまじない・ジンクス・心理テスト・バイオリズム・血液型性格判断などの「卜占」、超能力・霊・死後の世界・前世来世・UFOなどの「超自然」、虫の知らせ・バチあたり・正夢逆夢・北枕・夜爪などの「迷信」、初詣・豆まき・お宮参り・お墓参り・お守り・おふだ・おはらい・お日柄・縁起かつぎなどの「習俗」、宗教・神仏・姓名判断などの「信仰心」である。また俗信には、それに対して興味・関心を示すかどうかという「興味側面」、それを信じるかどうかという「信念側面」、さらにはそれに従って行動するかどうかという「行動側面」があり、それぞれの側面が独立でありうる(奥田他, 1992)。これが俗信の構造の大枠であると考えられる。

これまでの俗信の研究は、柳田国男氏の流れをくむ民俗学の分野で行われてきたものがある。例えば井之口(1975)は日本の俗信について、「厄年および年祝い」「祝的な食べ物」「妖怪の地域性」「妖怪と信仰」「死と俗信」など、古くから日本に伝わる俗信を丹念に洗い出し、考察を行なっている。心理学の分野でも俗信に対する関心は徐々に高まりつつあるが、心理学者による俗信の研究はまだ非常に少ない。例外的に野村(1982)が、狐憑きなどの憑きもの俗信についての社会心理学なアプローチで調査・考察を行なっている。

これらで取り上げられている俗信は、古くからいわば伝統的にあるもので、俗信の研究となれば、当然それらも視野に入ってくる。しかしながら俗信といえ、これまでも見てきたように、伝統的なものばかりでなく、かなり新し

いものもある。その中には、短時間のうちに流行り廃りが起こっているものも少なくない。本研究の関心はどちらかといえば比較的新しい俗信の方にある。それらを研究する際に、行動観察や実態調査だけでなく質問紙調査や面接調査などを活用する心理学的アプローチが非常に有効になってくると考える。

本論ではまず、これら俗信の中でも現在流行していると考えられるものに対し、現在の若者がどのような興味・関心を示し、どのようにそれらを捉えどのくらい信じているのか、またどのくらいそれらに実際に関って行動しているのかについて、筆者自身が行なった調査データを中心に述べる。それらを踏まえて、俗信がなぜ広く人々に受け入れられるのか、また「俗信を信じる」ということがどういうことなのかを考察し、今後の研究への展望を示したい。

◆俗信はどう捉えられているか？

まず、占いなどの俗信を若者がどのように捉えているのか、どのように考えているのかについて調べるために行なった質問紙調査について報告する¹⁾。対象とした被験者は大学生・短大生・専門学校生であり、現在の日本の若者の平均的なサンプリングとは必ずしも言えないが、概要を把握する上ではおおむね妥当であると考えられる。

[方法]

被調査者 茨城大学・大同工業大学・東海学園女子短期大学部・中京看護学校の学生計439名（女性235名、男性204名）。年齢は18～30歳で、平均値は19.1歳、最頻値は18歳であった。（なお、25歳以上の被調査者は6名だけである。）

調査の実施方法 心理学関係の講義中に受講生全員に質問紙を配布しその場で回答、あるいは被調査者に質問紙を持ち帰ってもらって回答させた。被調査者には、この調査は占いなどに対する考えを教えて頂くことが目的であること、占いなどに対してそれを肯定したり否定したりするいかなる考えも前提としていないこと、正しい答えや誤った答えというのではないこと、率直に自分の考えに基づいて回答してほしいことなどを教示した。なお、回答に要した時間は10～20分程度であった。

1) この質問紙調査は、名古屋大学の河野和明（現所属：愛知学院大学）と福内裕喜恵の両氏と共同で行なったものである。

フェイスシート 無記名としたが、被調査者の個人情報として性別・年齢・学校名・学年・学籍番号を記載させた。(学籍番号を記載させたのは、特異な回答があった場合に個人を同定して後から質問ができるようにするためであったが、実際にはそれを活用しなかった。)

質問項目 質問は、「霊」「神」「前世・来世」「天上界」「超能力」「正夢・逆夢」「予言的中」という超自然的なことがらが存在すると思うかどうかについての意見を尋ねる項目、「ココロジー」「G感性テスト」「西洋占星術」「こっくりさん」「Mr.マリックの超魔術」に対する知名度(どのくらい知っているか)・関心(どのくらい関心があるか)・行動(どのくらい試したことがあるか)・信念(どのくらい信じるか)についての意見およびそれらに対する自由記述を求める項目、「占い」「血液型と性格」「雑誌心理テスト」に対するイメージを尋ねる項目などから成り立っている。この他に、「不思議な体験」の有無と不思議な体験がある場合の内容、自分自身の「超能力」の有無と超能力がある場合の内容、「1999年に人類が滅亡するというノストラダムスの予言」に対する意見などを尋ねた。

[結果と考察]

超自然的なことがらの存在

図1に、「霊」などの超自然的なことがらの存在をどう思うかについて、「存在すると思う」「存在しないと思う」「分からない」の各回答の割合を男女別に示す。質問の「存在する」という言葉の意味をどのように解釈したかやや曖昧である(例えば「霊の存在」を、「実体として霊が存在する」とも解釈できるし、「概念として霊が存在する」とも解釈できる)が、例えば「霊が存在する」と回答した被調査者は、何らかの霊的な力が我々に及ぼしうる影響力としてあるのだと考えているものと思われる。

項目によって差異があるが、明確に「存在しないと思う」という回答が50%を越えているのは、「天上界」に対する男性の結果だけである。ということは、ほとんどの項目に対して、半数以上の人々が「存在すると思う」か、もしくは「存在」を明確に否定できず「分からない」と考えているということである。とくに「霊」に対しては、男性・女性とも6～7割の人が「存在する」と答えており、「正夢・逆夢」「超能力」についてもおよそ5割以上の人々がそう答えている。また、「前世・来世」に対する女性の「存在する」という回答も、5割

前後と高い比率になっている。いずれを見ても、これらがかなり多くの人に受け入れられていることが分かる。

全ての項目で「存在する」の回答の比率は、男性より女性の方が高かった。また「分からない」の回答の比率も、全ての項目で女性の方が高い。「存在しないと思う」という明確な否定の回答は、男性より女性の方が多くなっている。これらの項目に対して女性の方が肯定する率が高いことはしばしば言われることであるが、それに加えて女性の方が「分からない」という曖昧な態度をとりがちであることも、この結果からうかがわれる。

「ココロジー」などに対する知名度・関心・行動・信念

図2に、「ココロジー」などに対する知名度・関心・行動・信念の4側面について尋ねた結果を男女別に示す。

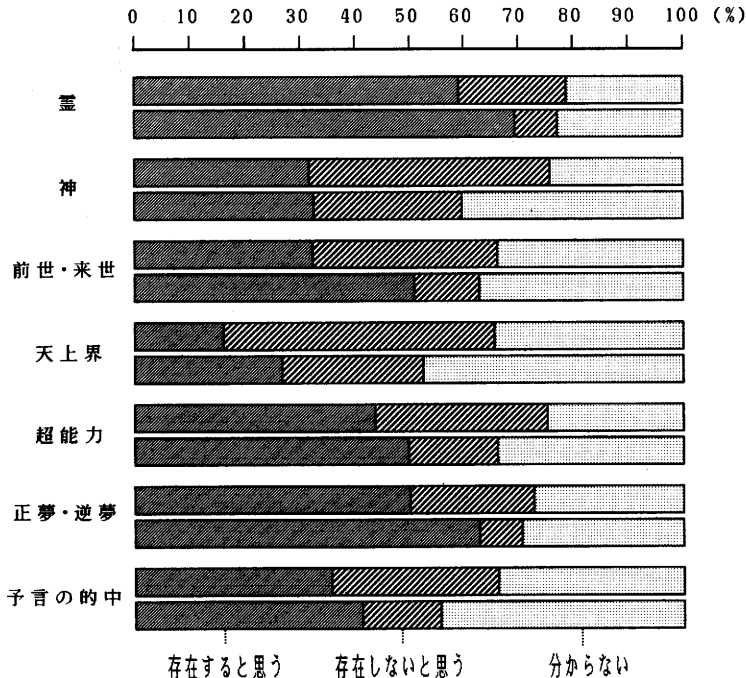


図1 超自然的なことがらの存在をどう思うか
(上段：男性，下段：女性)

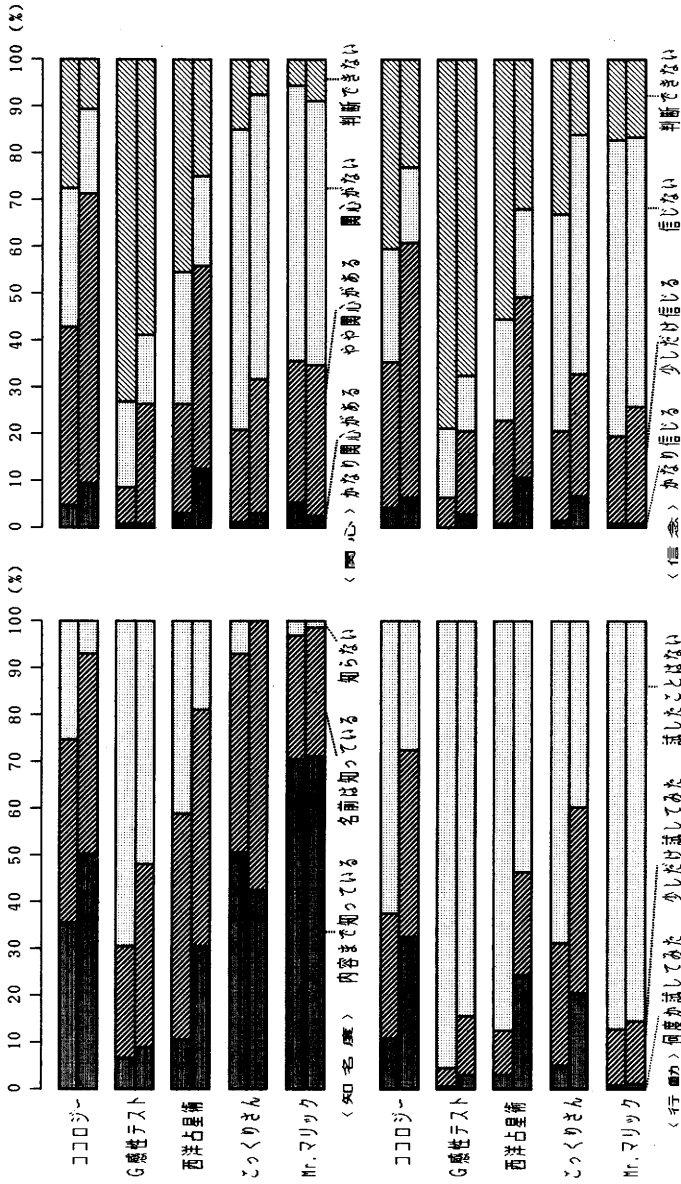


図2 ココロジーなどに対する知名度・関心・信念(上段:男性,下段:女性)

「ココロジー」については、この調査を行なった1993年の夏の時点でココロジーのテレビ番組が2年以上前に終了していたにもかかわらず、知名度は男女とも高い。また、「やや関心がある」まで含めて関心を寄せている人は、男性では4割程度、女性では7割以上であり、少しでも試したことがあるという人も同程度である。その内容を、「少しだけ信じる」とした人まで含め「信じる」と答えた人は、男性でも3割以上、女性では約6割と高率であった。ココロジーについての自由記述は、「心理学的な裏付けがある」「自分の意外な面が分かる」「人間関係上で役に立つ」「面白い」などの肯定的意見と、「強引すぎる」「あてにならない」「嘘っぽい」「インチキ」「適当」の否定的意見に大別できる。これらの結果は、ココロジーが若者にかなり受け入れられている一方で、否定的な見解を示す意見も少なくないことを示している。

「G感性テスト」はココロジーより新しく、統計的な根拠があるものとして登場してきた一種の心理テストであるが、その内容まで知っている人は1割程度であり、関心にしても信念にしても「判断できない」と答えた人が多く、自由記述でも「知らない」というのが多かった。その後、G感性テストについては雑誌などで取り上げられることがほとんどなく、ココロジーほど浸透しなかったと言えるだろう。その要因のひとつは、自由記述に「めんどくさい」という回答がいくつかみられたように、G感性テストがココロジーより複雑で手間がかかるものであることが考えられる。ただし、全般的に男性より女性の方が知名度・関心・行動・信念とも高いという傾向は、ココロジーとよく似ている。

「西洋占星術」については、どの項目もおおむね男女ともココロジーとG感性テストの中間程度の結果となっている。女性では、「やや関心がある」まで含めて「関心がある」とした人は5割以上であり、「少しだけ信じる」を含めて「信じる」とした人も5割に近い。男性はいずれもそれを下回る結果となっている。自由記述によれば、「ウソだと思う」「インチキだと思う」「あてにならない」などと見られている一方で、「神秘的」「運命的なものがある」と見なされ、「かなり信用できると思う」「当たることがあるので少し怖い」と見られていることが分かる。

「こっくりさん」に対する知名度はきわめて高く、とくに女性では「知らない」とした人は皆無であった。関心という点では、女性でも3割を越える程度であるが、試したことがあるという人は男性では約3割、女性では6割を越えている。そして、こっくりさんを信じるという人は、男性では約2割、女性で

は3割を越している。つまり、実際にこっくりさんを経験した人の約半数が、単なる遊び以上のものと見なしていると考えられる。自由記述では、「根拠がない」「単なる遊び」という意見がある一方で、「狐にとりつかれる」「呪われる」など「根拠があるのかもしれない」という意見も少なくなく、「危険」「怖い」「やらない方がいい」という意見が非常に多かった。

「Mr.マリック」は「超魔術」を扱うというタレントだが、一時期何度もテレビで放映されていたため、その知名度は男女とも9割以上と非常に高い。「超魔術」が単なる手品にすぎないという暴露本（ゆうむはじめ著『Mr.マリック超魔術の嘘』データハウス）まで出されているが、「かなり信じる」とした人は極めて少ないものの、男性で2割程度、女性で2割5分ぐらいの人が「少しだけ信じる」としており、「Mr.マリックの超魔術」が、いわゆるタネのある手品であると完全に見なされているわけではないことが分かる。ただし自由記述では肯定する意見は非常に少なく、肯定派も「少しは信じるけど、どこかで疑っている」といったものであり、「どうもあやしい」「インチキ」「手品だ」という否定的意見が少なからずあった。

これらの知名度・関心・行動・信念が項目間で連関があるのかどうかを調べるために、クランメールの連関係数を算出した（図3）。この係数は0～1の間の値をとり、値が高いほどそれらの項目間の連関が高いことを示す。（ただし、この値からは正の相関関係か負の相関関係かは一般に明らかにはならないが、この結果の場合は値が高ければ正の相関関係と見なしてよい。）その結果、知名度・行動の2側面では、さほど強い連関は認められなかった。関心という側面では、「ココロジー」「G感性テスト」「西洋占星術」の間で、必ずしも高くはないものの弱い連関が認められる。信念の側面では、その3者間で中程度の連関が認められ、他の「Mr.マリック」「こっくりさん」とも弱い連関が見られた。よって、これらの項目のうち知名度・関心・行動などの点では個人の好みが大きいが、このような項目の内容を信じるかどうかという点では「信じる－信じない」という次元の上に個人を位置付けることができると考えられる。

「占い」「血液型性格判断」「雑誌心理テスト」に対するイメージ

次に、「占い師に自分の運勢を占ってもらうこと」「血液型で人の性格を判断すること」「雑誌に載っている心理テストをやること」について、それぞれ

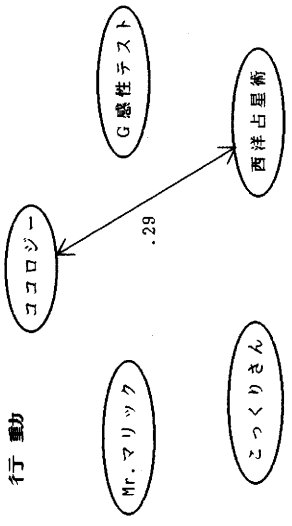
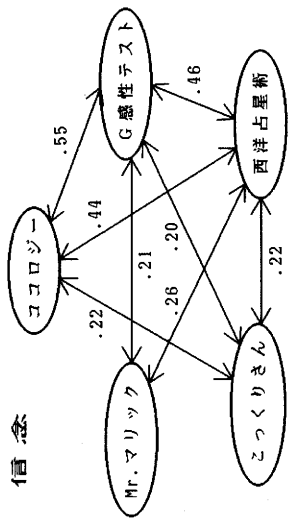
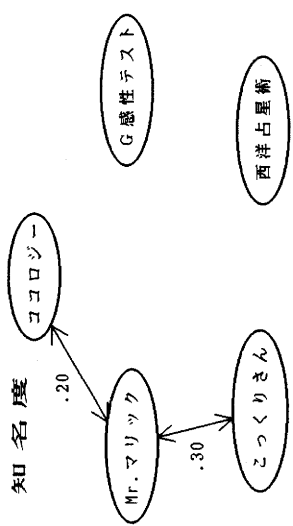
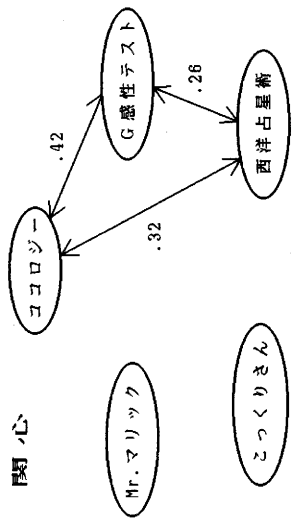


図3 ココロジ-などの相互関連度（数字はクランメールの関連係数：.2以上のみ表示）

「関心がある－関心がない」などのSD形式の尺度に5件法で答えさせた結果を図4に示す。

「雑誌心理テスト」「血液型性格判断」「占い」の順に「やる－やらない」の項目が男性で「やらない」の方向に傾いているが、これら3つはおおむね同じような結果を示している。いずれも「関心がある－関心がない」「やりたい－やりたくない」「好き－嫌い」などの点で、女性はやや肯定的、男性は中立もしくはやや否定的である。「あてになる－あてにならない」「頼る－頼らない」などの点は、男女ともどちらかといえば否定的だが、その度合は男性の方が高い。「科学的－非科学的」「根拠がある－根拠がない」などの点では、占いを除いて男女差は小さく、いずれもやや否定的である。占いでこれら尺度では否定的な結果が出ているが、その度合はやや男性の方が強い。「信じる－信じない」「影響される－影響されない」という点は、女性は中立であり、男性はやや否定的であるのが特徴である。

これら3つはこのように若干の相違があるものの、いずれも同様のイメージで見られていると考えられる。血液型性格判断や雑誌心理テストなどは、占いと比べるとある程度裏付けがあるものだと見なされてもおかしくないが、この結果でみる限り、そのようなことは示唆されていない。

「不思議な体験」「超能力」の有無

「『不思議な体験』をしたことがありますか?」という質問に対し「ある」と答えた人は、男性では24.1%、女性では22.5%であり、男女ともほぼ4人に1人の割合であった。その内容は、「デジャブ(既視感)を経験した」「金縛りにあった」「UFOを見た」「霊を見た」「正夢を見た」といったものが多く、とりわけ変わったものはなかった。これらの体験のほとんどは、本人が「不思議」だと思っているにすぎないと考えられるが、しかし4人に1人が、それを説明のできない不思議なことで捉えていることは興味深い。

「自分に『超能力』があると感じたことがありますか?」という質問に対しては、「ある」と答えた人は、男性では4.0%、女性では5.2%に過ぎず、せいぜい20人に1人程度であった。その内容としては「予知夢」がもっとも多く、「予言が当たる」「相手の言おうとしていることが突然わかる」「知らない人の名前が当たった」「サイコロの目が6回連続で6が出た」などがあった。これらは、たまたまそうなったということに過ぎないとことを、自分の超能力のた

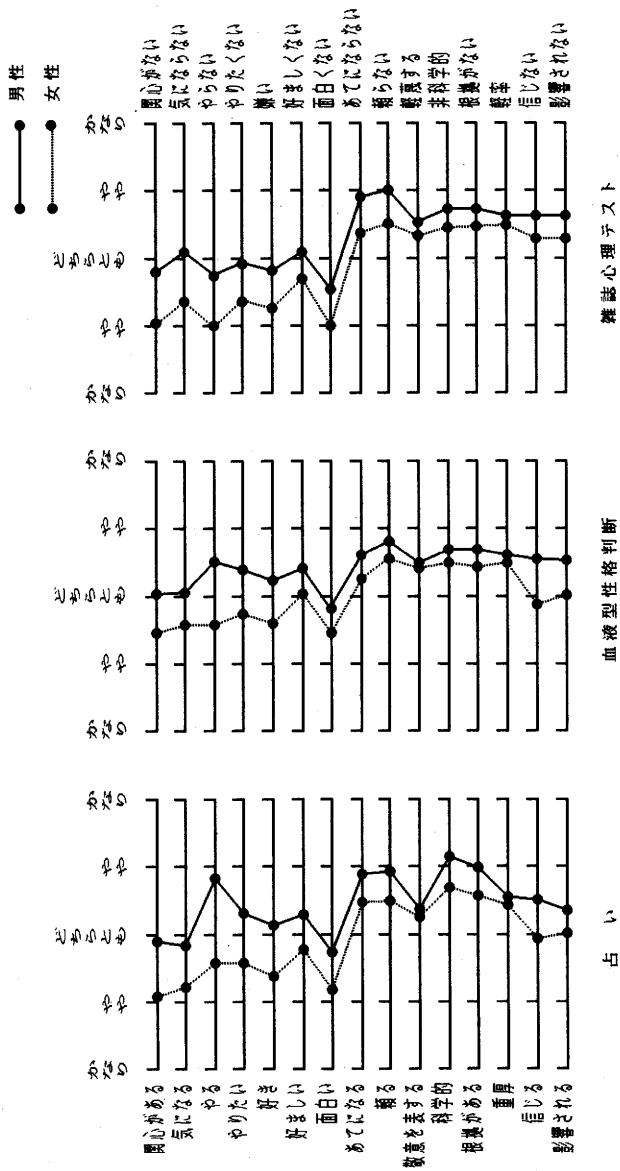


図4 占い・血液型性格判断・血液心理学テストに対するイメージ

めであると考えていると推測される。自分の意志で何度も超能力を使えるとした回答は皆無であった。

「ノストラダムスの予言」に対する意見

「『1999年に人類が滅亡する』というノストラダムスの予言がありますが、どう思いますか？」という質問に対しては、自由記述で回答をしてもらった。この質問項目が空欄のままになっているのは全体の6.6%に過ぎず、関心の高さがうかがわれる。

自由記述には、「ウソだ」「信じない」「別に何とも思わない」といった否定的な回答が過半数を占めたが、完全には否定できないという内容の記述も多数見られ、多少なりとも気にかけているという内容の回答は、男性では27.5%、女性では46.0%に見られた。このように性差が思いのほか大きい。

それらは、「信じている」「少しだけ信じている」というように明確に肯定する記述の他に、「ウソであってほしい」「当たってほしくない」「信じたくない」「やめてほしい」「考えないようにしている」「無事に過ぎ去ってほしい」といったように、「当たらないと思うし当たらないと願うが気にかかってしまう」という主旨の記述が非常に多く見られた。また、「昔は恐いと思ったが、最近あまり気にしない」というように子どものころは恐かった記憶があるという内容のものもあれば、その恐怖感が今も続いていて「恐い」という記述も多かった。

ノストラダムスの予言の根拠に言及しているものとしては、「ノストラダムスは今までの予言を当ててしまったから」というのがあるくらいで、それを突き詰めて考えようとする人は少ないようである。逆にそれを否定する根拠としては、「ノストラダムスの予言は、都合のいいように解釈されてきた結果だ」といった合理的な思考によるものが見られるが、霊能者としてテレビで人気を集めている宜保愛子氏に言及して、「宜保さんが、ノストラダムスに会って『大丈夫』と言っていたから大丈夫」という回答も見られた。

ノストラダムスの予言を否定したいが否定しきれない心情をうまく代表していると思われるのが、次のある女性被調査者による記述である。「1999年は、自分がまだ生きている年だから、滅亡されたら困る。ノストラダムスも別に自分のココロの中に秘めておけばいいのに、みんなに言っちゃって。自分は死んじゃったからいいけど、あとの人が『1999年に……』って考えながら生きてい

かなければならない。まったく迷惑な予言をしてくれたと思う」。

ノストラダムスの予言については、1973年に刊行された五島勉著『ノストラダムスの大予言 迫りくる1999年7の月、人類滅亡の日』（祥伝社）がそのブームの火付け役となった。その影響力は、今でも存続していると言える。

◆血液型と性格の関連に対する態度とその変容

血液型性格関連説について、若者がどのように捉えているかを調べると同時に、血液型性格関連説を否定する内容の講義（筆者による）を聞いてもらい、その結果、血液型性格関連説に対する態度がどのように変化するのか、講義の内容をどのように感じたかについて調べた。次にその内容について述べる。

[方法]

被調査者 茨城大学人文学部1年生（1994年度）151名（男性57名、女性94名）。年齢は18～20歳で、平均値は18.3歳、最頻値は18歳であった。

調査の実施方法と質問項目 「人文科学入門」の講義中に受講生全員に質問紙を配布し、その場で回答させた。まず講義を始める前に「自分とは相性が悪いタイプ」などネガティブに感じている血液型を尋ねる質問と、血液型で性格を判断することをどう思うかを尋ねる質問に回答させた。回答終了後、血液型と性格の関連を否定する心理学的知見を約1時間にわたって講義し、その後あらためて血液型で性格を判断することをどう思うかを尋ねる質問に回答させ、さらに講義に対する感想を自由記述させた。なお回答に要した時間は、それぞれ10分程度であった。

フェイスシート 被調査者の個人情報として性別・年齢を記載させた。（質問紙の裏面に講義の課題である小論文を書かせる場所として利用したため、学籍番号・氏名なども記載させることになったが、そのことによる回答への影響は特になかったと考えられる。）

[結果と考察]

ネガティブに捉えられる血液型

「次の各タイプ（自分とは相性が悪い・自分には好きになれない・隣には住みたくない・仲間として一緒に活動をしたくない・結婚したくない）にあてはまる血液型を挙げて下さい」という講義前の質問の結果を図5に示す。この質

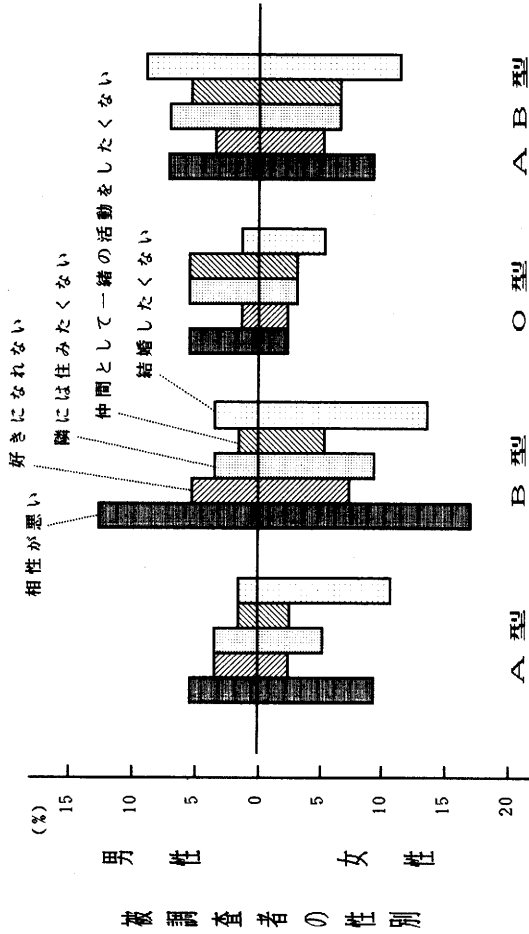


図5 ネガティブに捉えられる血液型

問ではA・B・O・ABの4つの血液型をそれぞれのタイプで複数選んでも良いこととし、そのように考える血液型ない場合は「なし」と答えてもらった。

対象となる血液型ごとに見てみると、全体的にはB型を選択する割合が相対的に高く、例えば「相性が悪い」タイプとしてB型を挙げているのは、男女とも1割を越えている。次いでAB型が挙げられる割合が高く、A型・O型は比較的低くなっている。これは、B型が「すべてにマイペースで個性の強いスペシャリスト」、AB型が「独特の二面性を持つ知的な合理主義者」（『C a z』扶桑社、1994、No.128）などと、ややネガティブに見なされていたり、A型が「気配り精神が豊かな常識人」、O型が「周囲を活気づけるパワーの持ち主」（同）などと、どちらかといえばポジティブに見なされていることと符合していると考えられる。これらの血液型ステレオタイプは、人々の間でのその内容の認識は必ずしも一致していないことが明らかにされているが（上瀬・松井、1991）、およそそのポジティブーネガティブのイメージは定着していると考えられる。

この質問では、例えば「相性が悪い」と考えるのと「結婚したくない」と考えるのでは、同じくネガティブな内容でも、相手とのかかわりの度合がかなり違うと考えられる。「相性が悪い」「好きになれない」「隣には住みたくない」「仲間として一緒に活動をしたくない」「結婚したくない」の順にかかわりの度合が深まると考えられるが、日常会話で気楽に取り上げられる血液型の情報が、かかわりの度合の低いことだけに考慮されるかと言えば必ずしもそうではない。「結婚」という人生の一大事においても、とくに女性の場合はO型以外の血液型を1割前後の人が自分の相手としたくないと考えている。もちろんそのように考える人が、実際の結婚を迎える段階になって、相手がたまたま自分の避けたいと考える血液型であっても、それで結婚をやめるなどということはないかもしれない。しかしこの結果は、血液型性格判断が偏見や差別の問題に直結する問題であるということを示し、あらためて認識させるものである。この質問ですべてのタイプに「なし」と答えた人は、男性では71.9%であり、女性では44.7%にすぎなかった。

血液型性格関連説に対する態度とその変容

講義では、血液型性格判断が日本で広まった経緯と社会的背景、血液型と性格の関連は一種の“錯覚”と見なせること、自分の血液型の情報で自分の行動

が変容するという“予言の自己成就”的な側面はあるかもしれないこと、「性格」の概念は個人に付与しているものというよりは他人との相互作用によって規定されるものであり物質である「血液」とは直接関係しないこと、血液型性格関連説が偏見や差別の問題とつながっていることなどを解説した。それらの知見を講義する前後で、「血液型と性格は関連があると思う」「血液型性格判断は楽しい」「初対面の人との話題に便利だ」「自分と友人の血液型の相性を考える」「血液型は自分を知る手掛りとなる」「『あなたは*型だから』と言われるのはイヤ」という意見に対して、「そうである」「まあそうである」「どちらとも言えない」「あまりそうではない」「全くそうではない」の5件法で答えさせた。その結果を図6に示す。

「血液型と性格は関連があると思う」という意見に対し「そうである」「まあそうである」という肯定的な回答をしたのは、講義前の男性で3割程度、女性では4割程度であったが、講義後は男女ともかなり減少している。一方、「あまりそうではない」「全くそうではない」といった否定的な回答は、講義後にかかなり増えている。「血液型性格判断は楽しい」と考える意見に対しても、同様の方向に意見が変容している。「初対面の人との話題に便利だ」「自分と友人の血液型の相性を考える」という意見に対しては、男性はもとよりそれを肯定する人が少なく、講義前後の変化はあまり認められないが、女性では全体的に否定的な方向へ変化している。「血液型は自分を知る手掛りとなる」という意見に対しては、女性の方が変化の度合いが大きい、男女とも否定的な方向に変化し、「『あなたは*型だから』と言われるのはイヤ」という意見に対しては、ほとんど変化は認められず、男性ではそれに対する肯定的意見がわずかながら増加している。これは、講義の内容を聞いて、自分が「あなたは*型だから……」と言われてもそれは根拠薄弱なことであり、これからは平気だと考える人がいたためと考えられる。

このように1時間ほどの講義でも、血液型性格関連説に対する意見が否定的な方向に変容することが示唆された。しかしながら、講義後の調査が講義直後であったこと、この変化が長続きするものかどうかを明らかにするための継続調査を行っていないこと、調査結果を講義をした講師（筆者）が読むことを学生が知っていたために余分な配慮（講師の望むであろう方向に回答にバイアスをかけるという配慮）があったかもしれないことなどを考えると、講義の効果が十分あったとは言い切れない。それでも講義が“無益”ではなかったこと

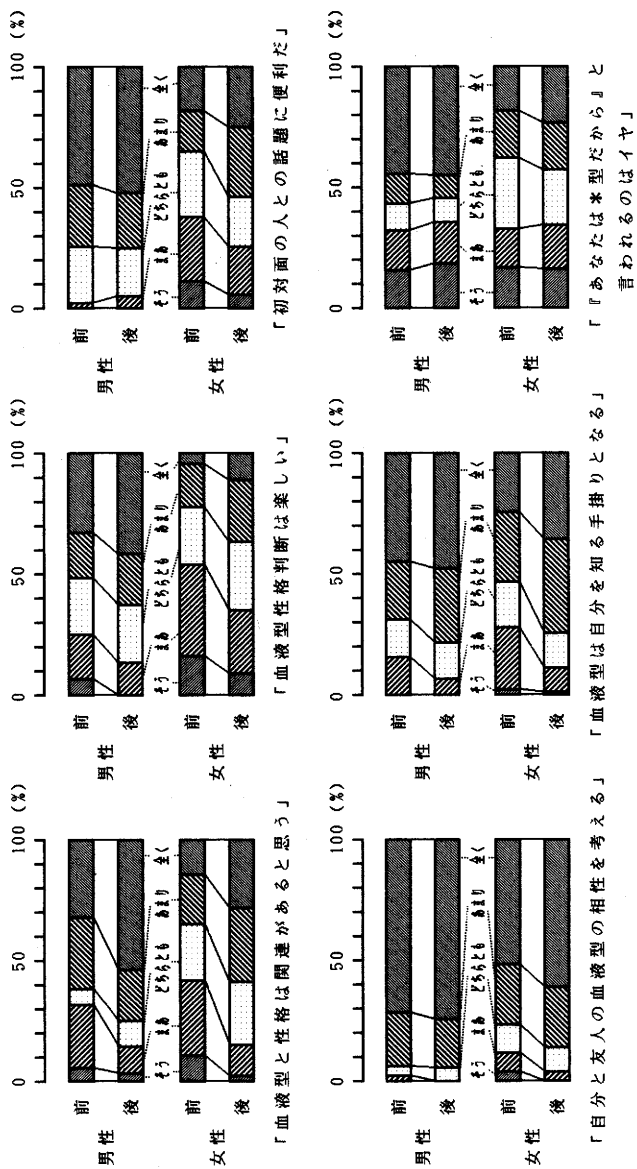


図6 講義（血液型性格判断説を否定する内容）前後での、血液型に対する学生の意見の変化

は、講義に対する感想からうかがわれる。

血液型と性格の関連を否定する講義に対する感想

講義の内容に対して、自由記述で感想を求めたところ、様々な興味深い記述が得られた。

その多くは講義の内容を支持する記述であり、「たいへん納得させられた」「もっともだと思った」「前からほとんど信じてはいなかったが、やはり裏付けはないのだと思った」といったものがいくつも見られた。「理論的に否定できることが分かって、大変ためになった」「あまり信じていないので、学問的裏付けができてよかった」「最初から信じていなかったの、その科学的根拠を得られたので助かった」といった記述からは、血液型性格関連説に対する懐疑を抱きながら、これまで自分ではそれを否定することができなかったことに関する充足感が感じられる。推測するに、そのような感想を抱いた人は、自分できちんと否定できるだけの論拠を持ち合わせていなかったり、友人との話の中で血液型が話題に上ったときに、自分はそのような話題に加わりたくないが否定してしまうと場の雰囲気壊してしまうのではないかと思ったりしたのだと思われる。そのようなことは、「講義を聞いてスッキリした」「全くそう思います。スカッとしました」という記述からもうかがえる。広く浸透している血液型性格判断であるが、どこかおかしいと思うのだが何となく受け入れているという中途半端な態度をとっている人も少なくないと思われる。これは、血液型と性格の関連を肯定する情報が巷にあふれているのに対して、それを否定する情報が目につくところであまり提供されていないことと無関係ではないだろう。

その一方で、血液型と性格の関連を強く信じていた人にとっては、講義を聞いても「やはり血液型と性格は関連があると思う」こともある。「何を言われても、血液型と性格は少しは関係があると思う」「血液型が一概に性格と関係あるとは言えないが、少しは特徴的な部分では関連があると思う」といった記述から、血液型に対するステレオタイプ的な見方を解消するのは容易ではないことがうかがわれる。大学の講義で講師が話すことがらは、それ自体一種の権威づけがなされていることであり、この講義でも（筆者の意図ではないが）その効果もあったであろう。「反対の人の話も聞かないと全面的には賛成できないなあと思う」記述などは、その権威づけに対する抵抗とも解釈できる。

講義の内容にいちおう納得しても、それとは違ったレベルで信念が変わらな

いということもあるようである。例えば、「血液型のステレオタイプの話は、とても納得しました。私はほんの軽い気持ちで血液型で人を見ていたけれど、興味のない人にとっては単なる偏見でしかないんだと思いました。でもやっぱり血液型の特徴であると思います」という記述にそれが表れている。そのように感じる人は、講義直後に否定論の方向に変化したように見えても、また元の肯定論に戻っていくということがあるのかもしれない。

◆「恋愛運をもたらす」という“真珠”を買った学生の考え

次に、恋愛運をもたらすという“真珠”をあるきっかけから通信販売で購入した女子学生を対象に行なった面接調査の内容を報告する²⁾。対象とした被面接者は1名であり、面接は、約4ヶ月の間にわたって3回、各々約1時間をかけて行なった。プライバシーの保護のために、あまりに私的な情報は削除してある。

[以前の“私”]

被面接者は、心理学専攻4年の女子大学生(21歳)である。以前の彼女は“非科学的”なものをほとんど信じておらず、「占いなどはバカみたい」と思っていたという。その理由は、例えば「同じ日に生まれても人は同じにならないじゃないか」といった合理的な判断に基づくものであった。また、いわゆる超自然的な現象に対する関心も高くはなかった。その彼女が、将来の結婚まで考えていた男性との関係がうまくいかなかったことをきっかけに、雑誌の宣伝で見た“真珠”を通信販売で購入し、まわりの友人を驚かせた。

[“真珠”とのかかわり]

彼女が購入した“真珠”は形がデコボコで、ネックレスになった1万円弱の代物であった。購入に際しては、誕生日と生まれた時間・血液型・名前といった個人情報を知らせる必要があり、送られてくる“真珠”はあくまで個人用で、1人1人に違った“オーラ”を発するものであるという。全体的に運が良くなるというものではなく、恋愛運だけに効果があるとされており、「“オーラ”が強烈なため普段は自分より20cm高いところに置いて、大切なときだけ身に

2) この面接調査の内容は、日本社会心理学会第58回大会でも報告した。

つけること」という指示がある。

相手の男性から邪険にされて、彼女はこの“真珠”を買うしかないと思ったという。“真珠”の効用の根拠はあるのかと聞かれても、「その時はそんなことは考えることもできず」「ワラにもすがる思いで」購入した。「自己暗示にすぎないのかもしれない」と思いつつも、「手段は何でもいい」と思った。そして彼女は、その“真珠”の「ワープロで書かれた程度」の説明書の指示に従ったところ、その後、道で相手の男性に偶然何度か会うなど「いいこと」が続いた。1万円近い値段は高いとは思うけど、「効用を考えたら絶対安いですよ！」と彼女は力説する。

“真珠”の効用は1年間とされており、「6ヶ月目が効用のピーク」で、「1年たつと、あなたを守ることに疲れてしまうから買い直した方がいい」と説明されている。彼女はそれに対し「初めは、こうやって購買を増やしていくのか」と冷ややかに思ったところもあるそうだが、「いいことがあれば、来年もまた買ってしまおうと思う」という。相手の男性との関係は結局解消してしまうのだが、その後も彼女はその“真珠”を持ち続けている。

〔“真珠”への原因帰属と自己正当化〕

“真珠”を買ってからの彼女は、相手の男性から何らかの連絡があるなどの良いことがあるときはもちろん、悪いことがあっても、やや強引にその原因を“真珠”に帰属させ、ときには自分の行動をそうすることで正当化する傾向が見られる。

その“真珠”を買うと、一時的には悪いことが起こることもあるがその後は良くなるという「運命の好転現象」があると説明されている。“真珠”を買ってから2ヶ月ほどして、相手の男性の行動が移り気であったときに、彼女はこれが「運命の好転現象」だと思い、その後は良くなるのかもしれないと考えた。しかし、相手の冷たい態度がつくづくイヤになりはじめ、“真珠”には「相手を忘れさせて、“新しい人”に巡り合わせる力があるのでは」と考えるようになる。その一方で、「だんだん悪くなったのは、“真珠”をお願いするのを怠ったからじゃないか」と思い、また相手の男性を想って“真珠”を大切にしたりもしている。

“真珠”を買ってから5ヶ月ほどしてからは、趣味の習い事の発表会準備などに追われ、「“真珠”を見る暇もない」ほど多忙になった。自室にある“真

珠”がふと目に止まると、ちゃんと見てお祈りしないといけないんじゃないかと感じる時があり、“真珠”に対して罪悪感を感じるようになる。彼女は「ごめんなさい、見なくて……という気になる」そうで、このあたりからか、“真珠”が人格を持った存在であるかのような捉え方をしているように見える。そんな“真珠”に祈らない自分に罪悪感を感じつつも、発表会の準備などで毎日が忙しく充実しており、「もしお祈りをして効力があって好きな人ができてしまったら、忙しくてかえって困る」という“必要以上の効力”まで考えている。

[“占い”などへの傾倒]

“真珠”を買った頃から彼女は、以前はほとんど見なかった雑誌の占い記事などを、よく読むようにもなった。あるときには、占いで運がいいという日に相手の男性に電話をしてみたが、冷たくされたという。しかしそのようなことがあっても、電話をしたのが「よく時間を見たら午前0時をまわり翌日になっていた。だから占いはやっぱり信じる」という解釈の仕方をしている。その一方で、いわゆる占い師は、「話し方が納得づく」で、何か言われたら「洗脳されてしまいそう」で避けたいと考える。それに対し雑誌などの占いは、自分で選択や解釈が可能だからいいのだという。

しかし、相手の男性との関係がほぼ崩れてしまってから、「占いでも何でもいいから教えて下さい」というかんじになり、「他力本願で、自分では何もできない」と考え、「新興宗教へ（知人に）連れていってもらおうか」とも思ったそうである。それでも、いわゆる「神」がいるとは思わず、「もし神がいるとしたら、世界に難民の人がいたり、悪いことをする人が苦しまないのはおかしいから」といった合理的な考えも持ち合わせている。

“占い”などがまったく気にならなかった以前と比べて今の“私”をどう評価するかを尋ねたところ、「女の子らしくなったのかなと思う」という。そして、むしろ現在の自分の方を肯定的に思い、「昔に戻りたいとは思わない」そうである。日常の彼女は、勉強などにも相応に打ち込んでいる。

[信じない人々に対して]

“占い”や“真珠”などを信じない人々に対して彼女は、追い詰められておらず「うらやましい」という気持ちがある一方で、「いいねー、幸せなんだねー、

苦勞してないんだねー」といった少々「イヤミを込めた気持ち」を抱くようになった。さらには、「感受性がないんじゃない？」とも思うという。

これらの感想は、女性に対してだけ抱くもので、そのような女性は「堅い人で、人間的につまらない」ように彼女には思える。しかし男性に対してはそうは考えず、「男性が占いにドツブリつかっていたらコワイ」と思う。自分の将来の相手となる男性には、“真珠”などに頼らず、「自分よりはずっと大人でいて、幸せでいて、自分を守り幸せにしてほしい」というのが、彼女の結婚観の一面である。

心理学専攻の彼女だが、「根拠がないと言われるとそうかもしれないけど、人の心はそんなものじゃ割り切れないことがあるじゃないですか」「人間関係など日常的なことと、心理学が実験室でやることとは、あまり関係がない」とも言う。「勉強しているときと普段は違う」と言う彼女にとって、心理学の勉強と“占い”などへの傾倒は、まったくの別問題のようである。

[まとめ]

“真珠”や“占い”へのややご都合主義的な原因帰属、それに伴う自己正当化、男性観と女性観の内容の相違、学問を考えるとときと俗信を考えるとときの“時間的住みわけ”など、彼女の信念体系の概要が、以上の面接結果から浮き彫りになってきたと思われる。彼女が現在の生活に不適應の状態にいるかといえば、けっしてそうとは言えないという印象を受けた。むしろ、“真珠”や“占い”をしたたかに利用しているという見方もできる。この事例から考えて、“占い”などが急に気になりだすということは、誰にでもありうることだと思われる。

◆俗信がなぜ受け入れられるのか？

以上の3つの調査結果を参考にしながら、俗信がなぜ受け入れられるのかという点について考えてみる。この問題には、人の心というものがしばしば合理的な判断をしそこねるといった認知的側面と、社会の中に俗信を許容する背景があるという社会的側面がある。

[信じやすく騙されやすい心]

例えば、血液型と性格に関連があると感じてしまう認知的側面には、どのよ

うな要因が考えられるだろうか。それには少なくとも次の3つの効果が働いていると考えられる。すなわち「フリーサイズ (freesize) 効果」「ラベリング (labeling) 効果」「インプリンティング (imprinting) 効果」である (大村, 1992)。

フリーサイズ効果とは、血液型性格判断で言われている性格の特徴というのが、誰に当てはめてみても「そういう側面もあるといえはる」というように、それなりに当てはまってしまうフリーサイズの服のようなものであるために生じる効果である。次のラベリング効果とは、フリーサイズの性格特徴を血液型ごとに強引に束ねて「*型」というラベルを強引につけてしまうために、それがもっともらしく感じられ、性格の多様性から目を背けることになってしまう効果である。3つめのインプリンティング効果とは、「×型には○○の特徴がある」という考えを抱いてしまうと、それが自分や他者の性格の認知に刷り込まれて (インプリントされて)、「だから自分は○○なのだ」「あの人は×型だから○○に違いない」という見方に偏ってしまうことになる効果である。インプリンティング効果は、予言の自己成就 (自分がそのようになると「予言」したがゆえに、実際にそのようになるよう振る舞い、「予言」どおりの結果が“成就”すること) と関連がある。

自分とどうも馬が合わないと感じる人が自分のまわりに2~3人いたとして、その人たちの血液型がたまたまある特定の「*型」だったとすると、その人の血液型に関する認知は「【*型】の人とはすべて相性が悪い」ということになってしまいかねない。つまり、非常に少ない事例から無理な一般化が非常に容易になされてしまう場合がある。例えば、特定の人を「雨男」「雨女」と呼ぶ俗信がある。これなども、その人がある行事に参加したときに雨が降ったということが2~3回続いただけのことであろう。ある特定の人物が行事に参加するということと、それによって天候が左右されるということのようにつなげ離れた事柄の間にも、人の認知は仮定の因果関係を見い出してしまうことがあるというわけである。このような「少数事例の無理な一般化」では、それに当てはまらない事例は例外としてほとんど考慮されないことになる。

“真珠”を買った学生の事例からも分かるように、人の認知は実に柔軟に作用し、統合的な解釈を見い出すことが可能なのである。例えば実際はO型なのに周りから「A型でしょう？」といつも言われるある女子学生は、A型であることを否定すると、「じゃあ、お母さんかお父さんがA型なんじゃないの？」

と言われるという。このような方略まで持ち出せば、あらゆるケースが説明できてしまうだろう。本当はA B型なのにA型だと思い込んでいたある別の女子学生（＝先に述べた「真珠」を買った学生）は、「自分はAが強いA B型なのだ」と考えて納得していた。

こっくりさんを実際に行なって、それに霊的な力などが働いていると思ってしまうのには、「自分は手を動かしていない」という思い込みがあるのだと考えられる。このように、先入観が認知を歪めてしまうということも十分ありうることである。先に挙げた「お母さんかお父さんがA型じゃないの？」と言った人には、「あなたの性格からしてA型が何らかのかたちで作用しているに違いない」という勝手な思い込みが働いていると考えられる。先に述べた調査からも分かるように、他に合理的に説明できること、たまたまそのようになっただけのことを、思い込みで「不思議な体験」や「超能力」であると考えてしまうこともある。

また他にも、ランダムに生起している事象に何らかのパターンを見い出してしまったり、自分が望む結果を勝手に見い出してしまったり、単なる噂を事実にしり代えてしまったりすることもある（Gilovich, 1991）。さらには、統計的なデータをあれこれ操作すれば、いくらでももっともらしい結果の提示ができて、それについて騙されてしまうこともありうる。人間の直感があてにならない場合がしばしばあるということを経験する必要があると同時に、この問題について心理学的なアプローチによる追究がもっと必要であると考えられる。

[オカルト情報の氾濫を許容する社会]

次に、俗信が受け入れられる社会的側面には、どのような要因が考えられるのだろうか。

先にも述べたように、“先進国”の中で日本ほどいわゆるオカルトに関する情報が日々流されている国もないという。視聴率の向上を目指すテレビ局や、販売部数を増やすことを目的とする出版社は、そのようなオカルトを詳しく追究あるいは批判する方向で扱うよりは、少々問題の捉え方が中途半端であっても、超自然的で奇跡的な雰囲気を煽る方が有利であると考えているように見える。それが高じてか、テレビ局ぐるみで真相を隠して超自然的な力があるかのように見せかける場合すらある。例えば、ある番組でMr.マリックが競馬の着順を当てるという「超魔術」を見せていたが、着順の予想が書いてある紙が入っ

た箱の背景に映されている競馬のシーンは、クロマキーという画像合成技術を使っただけのお粗末なものであった。それでも、「画面に編集がないことをお確かめ下さい」という意味のテロップが画面に表示されていたのだから、これはテレビ局のスタッフの一部も一緒になって視聴者を騙したのだと断言せざるをえない。しかしこのような情報であっても、先に述べた質問紙調査から分かるように、すべての視聴者から完全にインチキだとは必ずしも見られないのである。

例えば血液型と性格に関する情報は、毎週毎月のように発行される雑誌に載せられている。一方、その関連に否定的な学者の意見は、同じメディアに載ることはさきわめて少ない。たまに、ちょっと堅めの雑誌がそのような情報を取り上げることがあっても、必ずしも一般の人の目に止まりやすいとは言えない。『現代のエスプリ 334号』（至文堂）が1994年に「血液型と性格」に関する特集を組んで血液型性格関連説に批判的な論文を数多く載せたことは画期的であった。だが、同雑誌の発行部数は7000部ほどであり、血液型と性格の関連を肯定的に取り上げる雑誌の発行部数とは1桁もあるいは2桁も違っているのが現状である。このように流される情報の絶対量に格差があるため、影響力という点での勝負は初めからついている。その上、同じ紙面上での情報でないから論争にもなっていないのである。

俗信は、基本的に面白く楽しいものが多い。あるいは、神秘的な感じがしたり、ちょっとした恐怖心を煽って、ホラー映画を観るときのような“安全が保障された恐怖感”という快感を得させてくれるものもある。そのようなものが受け入れられる根本には、教育の問題があると考えられる。

現在の教育は、その内容が改善されようという動きはあるものの、やはり過程よりも結果を重視する知識偏重詰込型偏差値教育である。そこでは、いかに突き詰めて考えるかということよりも、いかに早く正解を出すかということが求められる。そのような教育は、それに順応できる一部の“エリート”は別として、基本的に面白くない。また構造的に“落ちこぼれ”を生み出すようになっている。このような教育に対する反動が、若者を俗信に走らせる要因のひとつだと考えられる。また、突き詰めて考えるというトレーニングが不足していることは、ちょっと不思議な現象をすぐに超自然的な力の存在に結び付けてしまうことと無関係ではないだろう。

また現在の日本社会には、いくつもの成功物語（サクセスストーリー）が飛

び交っている。政治家の例を挙げるまでもなく、“濡れ手で粟”で大金持ちになるという物語が蔓延していると言ってもよい。もちろんその中には、本人のまっとうな努力の賜物であるという場合も多々あるのだろうが、非常に理不尽に見えるものも少なくない。しかし、多くの人にとってこれらの成功物語は無縁のものである。また、自分がまじめに努力さえしていけば成功がつかめるといってもない。そんなときに、ささやかであっても成功感を感じさせてくれる俗信があれば、それに頼むということがあっても不思議ではない。

かつての村社会が崩壊し、家族形態も核家族化することによって、村の中でまとまっていた俗信の秩序が崩れてしまったという指摘もある（浅見，1994）。そのような社会は、俗信の大量生産を許容する社会である。マニュアル的でハウツーものの情報があふれたり、現世での自己実現の夢を手軽に見させてくれる宗教が受け入れられたりすることなどには、以上で述べてきた社会的背景ある。

◆「俗信を信じる」ということ — 今後の研究展望

中学校などでこっくりさんを禁止しているところが、少なからずあると聞く。そのように禁止をしてしまうと、こっくりさんは一種のタブーとなり、その信憑性が逆にいっそう増すことになる。そして、こっくりさんは隠れてやるものとなったり、やらなくなったとしても霊的なものとして心の中に潜在化することになる。いずれにせよ学校がこっくりさんを禁止すれば、実は無意識のうちに手が動かしているだけのことだというこっくりさんの真相は、究明されないままになってしまう。

こっくりさんのような俗信をそのまま受け入れることは、「なぜ？」と問う心をそこで停止させてしまうことになる（安齋，1990）。「俗信を信じる」ということは、ある意味で自分の頭で考えることを止めることにつながる場合があるのである。自分で“考える”ことをやめてしまったら、人間は何かを“信じる”しかなくなってしまう。そのことがもたらす“害”について、心理学は十分に考えていかなければならない。

現在、不思議なこととして一部の人に受け入れられている超能力などは、そのほとんどが人間の認知の不完全さに基づくものであったり、都合のいい解釈にすぎなかったり、あるいは実際にはタネがあるのにそうではないかのように見せかけているものが非常に多いと考えられる。それらの中にホンモノがない

とは言い切れないが、大部分はニセモノであるということである。それを見分ける目を養うことも、教育のひとつの役割であろう。また、それらの中で明らかに人を騙しているものや、人権を侵害する恐れがあるものに対しては、批判の目を向けていく必要がある。

ただし、俗信は定義からして「誤っている」とは限らない。だからこそ分からない事柄は、追究を続ければよいという立場がある。そのようなことを主張しているのは、現在は一部の物理学者であり（例えば、安齋, 1990; 大概, 1993）、筆者も共感するところが多い。

しかし皮肉にも“科学的”な立場が、俗信をいっそう際立たせるという役割を果たしてしまうこともある。明治後期ごろ日本で大いに話題になった千里眼は、“科学的”なアプローチの俎上にのせられ、肯定論がいくつも出された。結局この話題は否定的な見解で終結することになるが、この経緯によって“科学”が俗信に現実味を帯びさせることになる（一柳, 1994）。これはなにも過去においてだけのことではない。例えば宜保愛子氏の番組にある“心理学者”が登場し、宜保氏の霊能力を“実験的に証明”してしまったりしている。このようにして宜保氏の霊能力は、ニセモノである可能性がきわめて高いにもかかわらず、オカルトという怪しげなレッテルから解き放たれて、信憑性を得てしまうことになる。これらの“科学”は擬似科学であるとして切り捨ててしまうことはたやすいが、一般の人は必ずしもそうは見ない。

また、現在の“科学”は、非常に高度化したために、専門家でもなければ、そのカラクリを理解できないことが多い。つまり“科学”は多くの人にとってブラックボックス化しており、もとよりブラックボックス的な構造を持つ“非科学”と構造的に同型のものを受け取られていると考えられる（伊藤, 1994）。現在、いくら“科学的”な情報に接することが一般の人にもできるようになっていると言っても、その“科学”が人々の心の中では“非科学”と同型であるならば、小難しいイメージのある“科学”よりも面白い“非科学”，すなわち俗信を受け入れるというのも無理からぬことである。

一方、“真珠”を買った学生の事例からも分かるように、現在の若者が俗信をしたたかに利用しているという側面もある。そのような状態は社会的な不適応を生み出しているとは必ずしも言えず、見方によってはその人なりにうまく社会に適応していると言えるかもしれない。このような事例を考えると、本人が“真珠”を持っていることで精神的に安定しそれで良いと思っているのに、

それを奪うことが妥当なのかという問題も生じてくる。

とくに若い人々がどのように俗信を利用しているのかという現状は、研究者によって十分把握されているとは言えない。心理学界においては、俗信研究がようやく少しずつ認められてきた感があるが、「俗信を研究するなどということは俗っぽいことで、科学的心理学の研究には値しない」という風潮がまだにあることも影響している。一部の若者たちは、心理学者の考えなどよりはるかに先を行って、俗信との新たな共存関係を見出しているのかもしれない。

霊などというものは、実在しないものだからという理由で自然科学の研究者の多くからは無視されている。しかし、霊は実在しなくても、人々が思い浮かべる“霊的な存在”から人々が影響を受けることは実際にある。そういう意味においては霊は概念としては存在すると言える。その影響が“害”ばかりであるとは言えないかもしれない。霊が自分を守ってくれているという信仰が、心の安定をもたらすこともあるのだろう。

現在、既成の“科学”の枠組を越えて、“科学”から排除されている超自然なことがらも研究対象に据えていこうというニューサイエンスが台頭しつつある。しかしその方向は、従来からの“科学”の枠組を越えるものではなく、結局はかえって神秘主義的なものに墮してしまうのではないだろうか。霊などが実在するかもしれないとする立場ではなく、それらは概念的には存在して、人間の心理・行動に確実に影響を与えているものであるという立場から、研究をもっと進めていくことができるはずである。

本稿で“科学”と呼んできたものは“自然科学”もしくは“近代科学”のことであった。“人文科学”や“人文の知”は、このような点では“科学”を超えた研究が可能である。人々は“科学”と“俗信”のせめぎあいの中で生きている。心理学が現実の人間についての学であるならば、そのような現実を無視してしまうことはできない。

◆引用文献

AERA 1994 血液型考現学 - 性格ブームはなぜ日本で起こる? - AERA, 35, 32-36.

安齋育郎 1990 科学と「超能力」 - 「なぜ」と問うところ - かもがわ出版

浅見定雄 1994 新宗教と日本人 晩聲社

Gilovich, T. 1991 How We Know What Isn't So. - The Fallibility of Human

- Reason in Everyday Life. The Free Press. (ギロピッチ, T. 守一雄・守秀子
 訳 1993 人間の信じやすきもの - 迷信・誤信はどうして生れるか - 新曜社)
- Hassan, S. 1988 Combatting Cult Mind Control. Park Street Press. (ハッサ
 ン, S. 浅見定雄訳 1993 マインド・コントロールの恐怖 恒友出版)
- 一柳廣考 1994 〈こっくりさん〉と〈千里眼〉 - 日本近代と心霊学 - 講談社
- 井之口章次 1975 日本の俗信 弘文堂
- 伊藤哲司 1994 血液型性格判断と信じる心 現代のエスプリ, 324, 106-113.
- 上瀬由美子・松井豊 1991 血液型ステレオタイプの機能と感情的側面 日本社会心理
 学会第32回大会発表論文集, 296-297.
- 野村昭 1982 俗信の社会心理学 勁草書房
- 奥田達也・伊藤哲司・河野和明・福内裕喜恵 1992 俗信の構造へのアプローチ - 性
 差・年齢差を中心に - 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集,
 181-182.
- 大村政男 1992 性格検査の妥当性とはなんだろうか? - 「ココロジー現象」の流行に
 関連して - 研究紀要 (日本大学人文科学研究所), 44, 69-91.
- 大槻義彦 1993 超能力・霊能力解明マニュアル 筑摩書房